

ライフ・ヒストリーの事例

市川 洋・西 三郎

はじめに

われわれは2年前にライフ・ヒストリーの研究に着手した。目的は二つである。第1は、貧乏と疾病の因果関係の解明であり、第2は、所得階層別分布の内容と中味を明らかにすることである。われわれは1974年の研究注)において、政管健保の低所得階層の入院受診率が高いこと、特に精神障害の入院受診率が際立って高いことを発見した。すなわち低所得階層において、入院を要する疾患、特に精神障害の入院受診率が高いのである。この因果関係の解明はぜひとも行う必要があると考えられる。そしてこのためには、患者のライフ・ヒストリーのデータを採集し、分析する必要がある。

一方、最近所得階層別分布の研究が活発に行われている。しかしながら低所得層と高所得層の内容と中味は、その実態が十分明らかにされているとは言い難い現状にある。ライフ・ヒストリーの研究は、貧乏人が何故、どのようにして貧乏になり、金持ちは何故、どのようにして金持らになったかを解明する一つの方法である。所得階層別分布の研究は、分布の内容と中味の事実認識を行うことがまず先決と考えられる。

われわれは、低所得層において精神障害の入院受診率が著しく高いという事実を重視し、Q精神病院の入院記録から、ライフ・ヒストリーのデータを採集した。このデータは、1973、1974年のQ病院の全退院患者、および1965年から1974年までの10年間における老人病の退院患者のうち、Q病院の資料室に記録が存在するものの全部であって、300件強となる。従って、入院を要しなかった軽症患者はこの母集団に含まれていない。

われわれはこの貴重な300件余のライフ・ヒストリーのデータを、市川 洋、西 三郎、高橋紘士の3名で解析する予定である。おそらく解析に2~3年を要するであろう。そしてこの研究結果は逐次発表するつもりである。

(注) 市川洋、西三郎「医療費の統計と分析」経済企画庁研究シリーズ第29号、大蔵省印刷局、1974.

る。研究はまずデータの Description から開始される。しかしながら、作成された統計の内容を読み取るためにには、事実認識を必要とする。このため、ここにライフ・ヒストリーのデータの中から、精神分裂病患者のものを11例紹介する。

ここに紹介する11の症例は、精神分裂病患者のライフ・ヒストリーのうち、職業と家族関係に焦点を合わせたものである。この意味で、ライフ・ヒストリーの職業と家族関係の側面に関して、本症例はいろいろなタイプの代表的な面を含んでいる。症例の配列順序は原則として退院日付順による。この症例は今後発表されて行くライフ・ヒストリー研究結果の参照に資するであろう。症例は、すべての固有名詞に変更を加えてある。症例の記号は次による。+は死亡、×は離婚を表わす。

記載例

1973. 8 1973年8月

□54歳農業 父は54歳で農業。

○+35歳T.B. 母は35歳時に結核で死亡。

1. □+3歳肺炎 第1子は男子。3歳時肺炎で死亡

2. ○29歳中学教師 第2子は女子。29歳で職業は中学教師。

3. ○+20歳ガン 第3子は女子。20歳時にガンで死亡

4. □23歳東洋印刷 第4子は男子。23歳。東洋印刷に勤務。

症例 1 A女 1917. 5 生

父母 同胞 子供

□+64歳 1. ○A44歳 なし

胃腸病 □— 離婚

陸軍技術少将 2. □41歳

Z航空機K.K. 3. □+30歳

○72歳 4. ○36歳

1951現在

父は陸軍技術少将。無口で仕事一途に生きた人で、子供達にはやさしかった。母は真面目で厳格。Aは両親の

下で大切に養育された。東京の府立高女を優秀な成績で卒業。卒後都心の花嫁学校に通う。1939年海軍主計将校と見合い結婚。夫は帝大法学部卒で、知的には優秀、性格は内気で小心、決断に欠け、戦後は定職に就けなかつた事、子供が無かった事、義姉妹との不和等のため、Aの結婚生活は幸せとはいえないかった。

Aは無口、真面目、勤勉、几帳面で優しかったが、半面わがままで頑固な一面を有していた。婚家では苦労が多く、Aはひたすら我慢した。実家に帰っても、婚家の事については一切語らぬ。戦後夫は失職、Aは心配して父に頼んで職をさがしてもらう。夫は仕事はあまり出来る方ではなく、やめさせられた。Aは再び実父に頼んで夫を職に就かせたが、夫はそこでも失敗。Aは婚家でじめられ、夫にも乱暴された。

1949年頃（夫が再就職口でうまく行かなくなった頃）Aは沈み勝ちとなり、口もあまりきかず、終日ふとんの中にもぐり込むようになる。1950.4（A32歳）から怒りっぽくなり、ひとりごと、ひとりわらい、徘徊が目立ち、食事と睡眠が不規則となる。1951.4 R病院入院。夫の希望により2か月半入院の後、未治のまま退院。この後も1か月ほど夫はAをR病院に再入院させたらしいが、実家には告げられておらず詳細不明。

1954.1 徘徊、不眠、弄火がみられてRに再々入院。当時の病状は実家にはあまり連絡されていない。再々入院中に禁治産宣告を受けた。1956、再々入院中に離婚成立。（Aは承知）

1956.9 家庭に連れ戻すといってR病院を退院させ、Q病院に転院させた。このためR病院入院中の状態はQ病院に連絡されなかった。なお、離婚前の状態は婚家からの事情聴取困難。Qへの転院は家族の希望による。AはR病院入院中の記憶は不確かである。

1971.4（A53歳）社会適応訓練のため、Q病院において院外作業療法を行うこととなる。Aは社会復帰の意欲と期待を示すようになったため。1971.5から山田製作所に出勤開始。Aは、簡単な仕事であるが、力のいる仕事なので手が痛くなる。しかし永続きしそうです、といっている。1971.6 コンファレンス記録によれば、実母は1967から白内障で両眼失明。妹宅に経済的負担をかけずに同居。2.□は大手電機メーカーの技師で子供3人、3.□は大手機械メーカーの技師で子供2人。4.○の夫は貿易会社を兄と共同経営し、子供2人。実母は最初はAの弟宅に同居していたが、事情あって現在妹宅にいる。実母はAをよせつけない厳しさがある。A名儀の土地があるが、Aは禁治産となっており、Aは将来を不安がつ

ているので、禁治産解除の手続をQ病院側で進めている。Aは自分なりに病気を悩み、内攻する。院外作業に出る以前は、看護婦に悩みを打ちあけても仕方がないとあきらめ、病棟生活にも張りがもてなかつた。

1971.6はじめ。生れて初めての給料をもらった時のAの喜びようは子供のようであった。仕事の話をうれしそうに看護婦に語り、仕事にはなれたが、肩が痛いという。給料17,040円。1971.末、山田製作所より電話があり、8月いっぱい仕事を打切る、という。ドル・ショックによる注文激減のためである。9月1日、Aは職安に行くために履歴書を用意する。9月10日から加藤化学にQから通勤開始。日給1,000円。

Aは発病当時の家庭内のこと、その頃の心情の想起を正確に述べることが可能。次の通りである。……戦災にあい、さらにインフレのために経済的にずい分苦労した。私の性格はかなり勝気、神経質で我慢強い方。父は男らしく良い父で、幼い頃いつも父の帰りを心待ちにし、むかえに出ていた。戦中戦後の苦しい時期にも、ずい分優しくしてくれた。母には頼っていっても冷たくつき離されることが多かった。父には甘えられたが、母には甘えたことがない。母がもっと相談にのってくれていたら、こんな事にはならなかつたと思う。今は院外作業に出てよかったと思う。初めての体験だけれども、社会に出て一人前に働く事に生きがいを感じる。それとともに、イライラやクヨクヨが無くなつた。退院できたら弟夫婦と一緒に暮すか、養老院に入ろうかと思う……。

1971.12 退院後のアパート生活するためにも、現在の6万円の貯金を10万円ぐらいにしたい、という。1972.1 S病院よりガンと決定の通知。1月末S病院で右乳房ガン摘出手術施行。1972.4 加藤化学の院外作業再開。7月の日給1,200円。10月、弟の家では姪や甥の結婚の事があるので、Q病院から帰っては困るといわれた。兄弟はAに対して拒絶的。

1972.12 ボーナス5万円弱。時計を購入。1973.1 アパートを見付け、長期外泊の形で移る。1973.2 Q病院退院。加藤化学は不況のため、1973夏Aは解雇された。この後、1か月ほど山田製作所に勤めた。1974夏ガン再発。切らずに治療。1975.1 Q病院再入院。1か月後にガン治療のためS病院転院。なお、禁治産解除は以前に成功している。Aは国民健保。

症例2 B男 1945.11 生

実母は妊娠2か月で1945.4上海出航、1945.6内地上陸。当時甚だしい栄養失調状態であった。11月に三重の実母の実家にてBを出産、その後のBの発育は大体順調。

父母	同胞
○+実母	1. ○ 24歳
35歳 T B	病院薬剤師
□55歳	2. □ B21歳
中学教員	3. ○18歳 高校卒
○41歳	会社に就職
継母	1967 現在

1946.3 父が引揚げ、4月から家族全員がそろう。滋賀県の小学校入学。Bが小学校2年の時、実母は結核で死亡。4年間実母の姉がBの面倒を見ていた。Bが小学校6年の時、継母が来た。Bは継母に当たり散らした。

滋賀県の中学校卒業、県内の工業高校に入学。この頃からわがままと頑固が著明となる。高校入学後、しばしば休み、交友なく、クラブ活動を行わぬ。部屋に閉じこもり、人が来るとかくれる。高校3年(B19歳)の時、大学病院を受診し、精神分裂病と診断された。父はBを入院させることを考えたが、学校の教師と相談の上、入院させなかった。

1964.3 工業高校卒業。弱電会社に就職。自宅から通勤していたが、わがままなので、伯母の家から通わせた。伯母の留守中に会社の同僚とケンカをし、逆上したため、1964.7 滋賀県のP病院入院。1年間入院して1965.7退院。1か月後に父のつてで別の弱電会社に工具として就職。勤めて2か月目に、夜眠れなくなり、生活が乱れて來た。家中電気コードを引張りまわす。1966.1 P病院再入院。閉鎖病室に1967.3までおり、Q病院に転院。政管健保本人(継続)。

1967.7 (B21歳) Q病院から山川木工に院外作業に出る。Bは「家具木工はイヤだ。家を建てる大工になるのだ」という。ワーカーが大工の親方に相談した所、道具(2万円位)をまず自費で購入しなければならぬという。大工の仕事は受入態勢の問題もあり、院外作業療法に向かない点がある。8月初め、Bは出勤時間になんでも、出勤準備が整っていない。山川木工での院外作業は中止となる。父から大工道具代として2万円到着。父曰く、「この2万円は働いて返却してほしい」。

1967.9 初め、高橋木工への院外作業開始。20日ほどで中止し、渡辺プレスへ職場転換する。渡辺プレスは従業員100人位で、熔接の仕事。11月30日から本雇いとなるが、眼にケガをする。熔接時の眼鏡着用を守らないため。1969.1 アパートに引越し、退院した。Bは家族に受け入れられず、いったん東京で生活することでの退院した。

渡辺プレスでのBの評価は良かったが、Bはアパートの孤独に耐えられず、訪問したQ病院担当医に泣いて再

入院を依頼。結局アパート生活1か月でQ病院に再入院。1969.4 無断離院。帰院後、閉鎖病棟に転棟。1971.5 Q病院退院。この時Bは国民健保であった。同年8月、L病院に入院、1972.2 L病院退院。1972.5、Q病院に再々入院した。生活保護適用。1972.12 看護士に暴行。1973正月に外泊したが、家族との疎通に失敗。1973.3院外作業療法の就職に失敗。2日後、近くの従兄弟を訪問すると外出したまま帰院せず。

1973.3 行方不明となってから3日後、神戸駅の近くの観光ホテルで縊首自殺したと所轄警察から連絡あり。警察の調べによれば状況は以下の通りであった。前日Bは神戸駅から5分位の観光ホテルに投宿。一泊分料金を前払いして外出。全く平穏であった。翌朝、係の者が朝食準備ができたむねBに声をかけようとして、縊死を発見。遺書は3通あり、1通はホテルあて、めいわくをかけることをわびている。1通は担当医あて、最後の1通は家族にあてたものであった。

なお、Bの父は退職した元校長であったが、Bの死により父の態度は大きく変化した。

症例3 C男 1929.4生

父母	同胞
□61歳	1. □C 35歳
アパート管理人	2. □32歳 会社員
○57歳	3. ○30歳 既婚
	4. □27歳 会社員
	5. ○23歳
	1964 現在

京都で生れ、両親の下で養育された。中学2年の時東京の開成中学に転校。学校の成績は上位。1945 戦敗時高校1年。この頃から成績低下。神経衰弱気味となる。1951 私立大学経済学部入学。1954 卒業するも就職できず、1955.4 鈴木ステンレスに入社。仕事は配達。1956.4 生命保険の外交員2か月勤務。結局無理であった。1956.6 職安の世話を印刷会社、ゴム会社のパートタイム、又は家でプログラミングしていた。

1959 (C30歳) 暴れ、近所の人に暴行。物をこわし、駐留軍自動車に追いまわされる、殺される等と妄想が現れた。R病院に入院し、退院したが、病状悪化のためR病院に再入院。1964.4まで、5年間R病院にいた。1964.6 Q病院入院。Cの父はマンションの管理人。6畳の一室に両親と娘の3人暮らして、Cは自宅に外泊不可能であった。

1971.4 (C42歳) Q病院の作業療法として、後藤清掃K.K.に通勤開始。20日ほどで会社から来なくてよいと言われた。しかし翌日会社から、再び来るように言われ、

1週間ほど勤務した。会社の都合で打切りとなる（仕事がなくなったため）。1971.10 近くの小林菓子店に出勤。しかしその日手紙と3,000円もらって帰院。先方からの申出は、菓子製造工としてふさわしくないので、退社願いたい、とのこと。1972.4 院外作業療法として、田中自動車に就職決定。しかし面接でダメとなる。1972.10 院外作業として中野メッキ工業就職決定。しかしCは身体の調子が悪いといって、4日位でやめてしまった。

1973.2 山形製作所の院外作業の話があったが、1日でやめた。3月、北川理工に面接、しかし不採用。その次に山形製作所に6日勤めて11,000円もらう。1973.8 山本時計に勤務することとなつたが、10日で仕事がむづかしいといってやめた。11月、職業センターに行く。1973.12 渋谷の細田印刷で梱包発送の仕事を見付け、Q病院退院。なお、Cは生活保護の適用であった。1975.11 現在CはQ病院の夜間外来に通院中。

症例4 D男 1920.3生

父母 同胞

<input type="checkbox"/> +48歳	—	1. <input type="checkbox"/>	4. <input type="circle"/>
急性肺炎	—	2. <input type="checkbox"/> D	5. <input type="checkbox"/>
○49歳	—	3. <input type="circle"/>	

1944 現在

両親に養育された。小学校卒。成績下位。小学校卒後、近藤汽船の火夫として、入隊まで勤務。陸軍一等兵。1944.3 (D23歳) 兵営で発病。陸軍病院からT病院に転入。1944.6 Q病院に転入。1962の病状は妄想を中心とした。自分は皇太子である、陸軍中将である等。

1972.5 (D52歳) 後藤清掃にQ病院から院外作業として勤務。1973.1 Dが後藤清掃に通勤開始してから9ヶ月たつた。仕事は何でもやれるので、会社としても喜んでいるという。

1973.12 交通事故にあう。陸橋下を横断中、オートバイがぶつかってきた。加害者は25歳のバンドマンで、九州から単身上京中。頭蓋骨陥没で、加害者の方が重傷である。DはU外科に6日間入院。加害者は脳外科に入院し、加害者の母は生活保護の申請中である。Dは加害者が堅気の人ではないため、カラマれても困ると判断し、戦特法申請。医療費は5月にU外科に支払われた。

Dは後藤清掃にQ病院から通勤継続。仕事は盆の灰かきで、自分のペースでできるといふ。日給は1300円。月3万円位になる。1974.4 Dの仕事は生ゴミ処理、雑草とり、下水の掃除となり、楽になった。アパートに住み、アパート代は月2万円程度。Q病院から長期外泊の形であったが、1974.5 退院とする。退院後も後藤清掃

に安定継続して勤務している。1975.11 現在Q病院夜間外来通院中。戦特法適用。

症例5 E女 1948.3生

父母 同胞

<input type="checkbox"/> +56歳	—	1. <input type="circle"/> 29歳 既婚	4. <input type="checkbox"/> 21歳
脳卒中	—	2. <input type="circle"/> 27歳 既婚	5. <input type="circle"/> 17歳 高校生
○51歳	—	3. <input type="circle"/> E 24歳	

1972 現在

Eの父は川口市にてとうふ製造業。小学校5年の時出火全焼。しかし4か月後に再建、家業再開。地元の小、中学校卒業(1963.3)。同年4月美容学校入学。1964.4からインター1年間。1965.5 (E17歳) 国家試験合格、美容師となる。初めの8か月間浦和の美容院に勤務。眞面目で評判良く、主任美容師となる。1966年母の知人が川口市に美容院を開設。そこに引抜かれて約1年間勤務。1967 (E19歳時) 大宮の美容院に2~3か月通う。この頃から欠勤が多くなり、夜間不眠、日中はゴロゴロ、対人恐怖、だらしなくなつた。家庭内でもわずかな事を氣にして兄弟げんかをする。結局大宮の美容院をやめ、南浦和の美容院に移ったが、ここも2か月でやめた。病前性格は素直で明るく、従順、優しく親思い、友人も多く好かれた。内攻的で几帳面、神経質。しかし次第に怒りっぽく、頑固、だらしなく、無為となる。

1968~1969 全く勤めに出ず、ブラブラして過す。化粧販売人から数万円も化粧品を買込んだり、知っているタイプ学校からタイプライタを無断で持出して入質。金もないのによく遊びに出歩く。1969.8 (E21歳) 突然家出して行方不明。1970 実父は脳卒中で死亡。

1972.6 大阪のキャバレーで働いている事が判明、母が迎えに行く。家出期間中の事情不明。キャバレーの支配人によると次の通りであった。……1969.8 男につなれて、そのキャバレーに売られるようにして来た。その寮に入り、ホステスとして勤務。長期間休むことはなかった。1972年に入ってから、元気がなくなる。4月頃から誰とも口をきかず、同僚が話しかけると食ってかかる。食事もあまりとらず室に閉じこもる。Eは家族の現住所を終始語らなかったが、支配人がきき出した本籍地から抄本をとりよせ、現住所判明、6月に家族に連絡がとれた。

母はEをつれて帰った。Eは当時妊娠6か月で、男は不明。帰京して産婦人科を受診したが、すぐ精神科を紹介された。別の病院で中絶施行。保健所から連絡が行き、1972.8 Q病院入院となる。

1974.11 (E26歳) からQ病院の近くの園芸センター

の花売りの院外作業療法に勤務。仕事熱心で、にこやかに働き、評判良好。1975.2から自宅付近の歯科医院の事務兼助手の仕事を外泊の形で14.00～19.00まで継続。慣れるに従って熱心で、仕事上問題なし。1974.5退院。Eは病識なく、対人関係はかなり緊張・疲労する。Q病院入院中生活保護適用。

症例 6 F女 1941.11 生

父母 同胞

□+	—	1. <input type="checkbox"/> 会社員	4. <input checked="" type="radio"/> 会社員
脳卒中	—	2. <input checked="" type="radio"/> ○	5. <input type="checkbox"/> 会社員
○	—	3. <input checked="" type="radio"/> F	

Fの略歴表

1941.11	群馬県に生れる。
1967.4	群馬県V病院入院 2か月間
1967	鹿児島県W病院入院 3か月間
1968	W病院再入院 3か月間
1969.3	神奈川県X病院入院 8か月間
1970.5	Q病院初回入院 1年間
1971.9	Q病院の療友と結婚、挙式
1971.10	Q病院第2回入院 1年間 (夫もQに入院)
1972.7	神奈川県営住宅入居
1973.1	Q病院第3回入院 2か月間
1973.6	Q病院第4回入院 2か月間
1974.1	2階から飛降り自殺企図
1974.3	Q病院第5回入院 3か月間

Fは3,4歳～中学2年まで同胞と別居し、祖父母に育てられた。群馬県の高校の成績は上位、1960卒業。卒後日西化学に勤め、キーパンチャー2年、計算事務1年。小林製紙の経理事務8か月。1964(F22歳)不眠、追跡妄想、被害妄想あり発病。4つの病院を転々す。1970.5 Q病院に単独で来院、そのまま入院となる。この時Fは国民健保。同年11月(F29歳)から1か月、近くの郵便局に院外作業勤務。翌年1月から1971.5月末まで近くの田辺医院で院外作業勤務。Q病院の療友と結婚を前提として同棲することとなり、5月末退院。Fはこの時国民健保。田辺医院の勤務は7月末まで継続。

1971.9 夫の実家で挙式。夫は木村製本のパートである。夫もQ病院の外来に通っていた。10月初めQに再入院。その後夫もQに再入院。夫は木村製本の健保本人だが、Fは夫の扶養家族の申請をしていなかったため、健保家族の取扱いはできず、かつ資格喪失後の療養の給付も受けられない。夫は自分で傷病手当金の申請手続を行う。1971.12末、夫の母上京。夫とワーカーが福祉事務。

所に行き、Fの生活保護申請を行った。福祉事務所担当者はQに来てFと面接、その後生活保護適用となる。なお、Q初回入院時はFは国民健保で、保護義務者は兄であった。

1972.5から2か月間、Fは院外作業療法のため、プリンセス自動車内診療所に勤務。7月末、夫とともに川崎の住宅に引越す(Q病院から外泊の形)。この頃夫はQ病院を退院し、木村製本に復職。しかし住宅から通勤便利な所に勤め口をさがしている。1972.9から、Fは川崎の結婚式場アルバイトの院外作業を2か月勤務。10月、Fが所轄福祉事務所に夫の給料明細書を見せた所、夫がFの一部負担金を支払うことになった。Fは退院させてほしいと言う。夫の母は退院願に捺印してQあて郵送。10月FはQを退院。その後Fは地元デパート呉服売場のアルバイトを2か月勤めた。

1972.11 福祉事務所から通告あり、生活保護の打切りと入院費の一部負担金1万円弱を11月中に支払うよう、とのこと。また、パートの勤務先で社内上層部のゴタゴタを聞かされ、対人関係のむづかしさを感じ、以後人の言うことが気になり出す。再発し、1973.1 Q病院に3回目の入院。2か月で退院。この時Fは政管健保家族。

1973.6 夫は家具屋に転職。この時会社から夫のことを聞きたいと呼出され、生活の不安がつのり、再びQ病院に電話と手紙をよこす。Qに第4回目の入院となる。退院後、1974.1 2階から飛降りて自殺企図。3月に5回目の入院となる。通算すれば9回目の入院である。入院時のFの小遣い銭2千円。4月に3千円、5月初め千円、5月末5千円、計9千円。Fの3月分(8日間)の医療費(一部負担金)9千円弱は完納。4月分2万円強は6月になんでも未納で、ワーカーが心配している。3か月間の入院の後退院。夫の勤務先は零細企業である。その後Fは腸閉塞と腹膜炎を併発して1974.10死亡。遺骨の引取りについて、もめた。結局入籍してあったので、夫の実家で葬儀、埋葬。

症例 7 H男 1934.12 生

父母 同胞

□48歳—	1. <input type="checkbox"/> H22歳
○48歳—	2. <input checked="" type="radio"/> +10歳 肺炎
	3. <input checked="" type="radio"/> 19歳

1957 現在

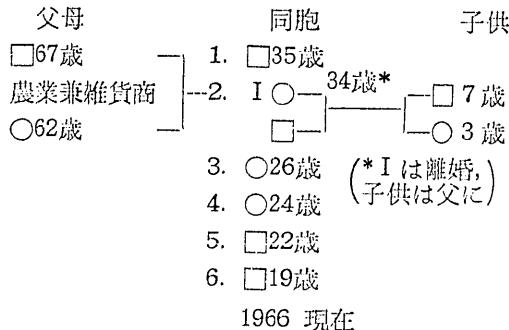
Hは実父母に養育された。父は木工会社を経営。品川の高校卒業。成績下位。私立大学に入ったが、3か月で中退してしまった。中学時代から学校の成績が下がりだ

し、高校に入ってから成績は急落。毎日通学していたが、机に向って人名、友人の住所、歌謡曲の文句等を、同じものを細字で繰返して書いていたことがあった。この頃が発病と推定。1955年（H20歳）Y病院に短期間入院。1956年末S病院に5か月入院。2か月後 1957.3 から1959.9までQ病院に初回入院。2か月後の 1959.11 Q病院に再入院。

1970頃から、退院するには作業に参加せねばならぬという自覚がでてきた。1972にデイ・ケア方式による長期外泊で一層改善されて来た。家族のHに対する理解も深まり、家から授産所に通う方向にもってゆく方針とする。1972.12（Q37歳）作業療法として自宅における作業を試みる（自宅はQ病院に近い）。Hは外泊するつど、「仕事はないか」とたずねる。自宅にはHにいつも仕事を与えるよう準備できない。授産所からの仕事を自宅で行うこととし、1973.1から自宅に院外作業通勤とする。1月10日から通勤定期購入。

1973.3 自宅への通勤継続。授産所からの仕事にも楽しみを感じるようになって来た。院内作業よりも状態良好。袋にハンカチを入れる仕事。1日に200個ずつ可能。1973.11 父の談では、最近授産所の仕事（プラスチック）が切れたので、家でブラブラしている。未だ授産所に通うのは、ちゅうちょしている、との事。1974.1 授産所の仕事継続。原稿用紙を袋に詰める作業。材料は蒲田まで自分で取りに行っている。1974.8 Q病院退院。退院後家の手伝い等をしていた。家人はQ病院の院内作業に通うことを希望。病院内の方が安心であるという。1975.9 Q病院内売店で日給1000円のパートの仕事を週2~3回することとなったが2週間で解雇。国民健保。

症例8 I女 1931.12生



秩父に生れ、両親の下で養育。非社交的であった。秩父の高女卒。成績中位。高卒後、家事手伝いを5~6年。1951年（I女24歳時）結婚し、2子あり。夫は鉄道職員。夫は次男で、結婚して新居に入ったが、姑とうまく行かず。しゅうとめは気の強い人。I女の家の近くに弟の家

を建てたが、その間Iの家に泊った。弟の新居ができるについて、Iの嫁入道具をかせと言ってしゅうとめが持去り、トラブル。この頃から精神変調。最初夫の会社の病院を受診、M病院を紹介されて、1962.2（I30歳）入院。3か月で退院したが、これはIが帰りたいと言い出したため。1962.9 M病院に再入院。4か月で退院。1963.3 3回目のM病院入院。4回目のM病院入院は1963.8から1966.3まで約2年半。この間、1965.2 正式離婚（裁判による）。

1966初め、生活保護の審査会で、Iが働きに（作業療法）出て日給420円を得ており、月1.5万円程度の収入があるという。担当官がM病院でIを診察し、この時Iの着衣整い、応待正常、言動活潑であった。その結果審査会は入院の要を認めず、通院加療で良いとしたが、病状判定のためQ病院に転院（1966.3注）生活保護適用。当時両親は郷里で雑貨と食料品店を営んでいるが高齢である。長兄は都内でアパート住まい。長兄は両親の経済的援助をしており、Iを引取りたくない。Q病院では、今迄退院してもすぐ再発しているので、慎重を期すを要すと判断。

1966.6 中村縫製に院外作業開始。会社の評判良好。日給280円。9月中村縫製退職。病状悪化のため。前日母と姉が面会に来院。1967.9 和田家のお手伝いさんとQ病院の森さんの代りに行く。和田家は12人家族の家で、部屋の掃除（10畳位の部屋が7つある）、洗濯等の作業。7日後に症状悪化の兆候あり中止。1968.3 西川紙器に院外作業勤務。ボール紙に上紙をはり、ヘリを折る。仕上げてつみ上げる。3週間後に病状悪化して中止。日給300円。

1971.5 Q病院の近くの井上機械に院外作業勤務開始。自動車の部品組立て作業で1日8時間労働。10月、日給600円プラス食事手当100円、計700円。1972.1月から日給970円にアップ、月2万円強。月給制でないため、ゴールデンウィークでは月2万円で、これでは暮らせない。6月から清公社に通ってみる。1週間で井上機械にもどる。井上機械にはQ病院の検査のためと言ってある。1973.5 井上機械には休暇をとることにして、精密機械組立ての内田精機に行ってみる。内田精機は1400円で

* 1966年当時の社会適応訓練としての院外作業の重要性が認識され始めたばかりであり、院外勤務とはいうものの、それがどういうものであるかという認識は一般には不充分であった。当時は勤務可能で収入も得られておれば、入院は必要ないのではないか、と専門外の人々には考えられがちであった。医療周辺の人々さえ、そうであった。現在では社会適応訓練は必ずしもそうではないことが認識されている。

待遇が良いため、内田精機に院外作業転職決定。井上機械はパートであったが、内田精機は正社員で、健保もある。1973.11から日給月給1600円に昇格、1974.8から2,000円に昇給。製造課長によれば、Iは非常に良好で速度も早くなつた。しかしこの所不景氣で、仕事は半分くらいしかない。Iは9月に退院。当時生活保護適用。

1974.10 Iは地元福祉事務所に出頭。福祉の調べでは、市民課にIの住民票が見当らぬという。Q病院のワーカーは本籍地役場に照会した所、Iの戸籍は離婚の際抹消されている。再照会した所、役場の調べによればIの戸籍は松戸市に転籍になっている。Iはこのことを知らぬ。松戸市に戸籍のあることをワーカーは確認。住民登録完了。なお、Iが井上機械に在職中に、他社に通つてみる求職態度には問題がある。会社に対する礼儀、状況判断が不足しており、偏った心性を物語っている。利害一点張りで余裕のないことは、今後の職場でも起り得る。

症例 9 J男 1932.2 生

父母

<input type="checkbox"/> 64歳	1. <input type="checkbox"/> 37歳農業	7. <input type="circle"/> +16歳
<input type="circle"/> 57歳	2. <input type="checkbox"/> +5歳	8. <input type="checkbox"/> +3歳
	3. <input type="checkbox"/> +20歳戦死	9. <input type="circle"/> +3歳
	4. <input type="checkbox"/> 29歳呉服屋	10. <input type="checkbox"/> 15歳
	5. <input type="checkbox"/> +3歳	11. <input type="circle"/> +3歳
	6. <input type="checkbox"/> J24歳	

1957 現在

父は春日部で農業。Jは両親の下で養育された。高等小学校卒。成績中位。卒後家業の農業を手伝う。1955.7 (J23歳) 発病。人が自分のうわさをする等と言い、おかしいと思っていたら突然7月に家出。村をあちこちブラブラして翌朝帰宅、理由不明。1か月近くの病院に入院。11月、浦和のM病院に6か月入院。退院後再発して1956.12 Q病院入院。1974.2 (J42歳) 1週間はQ病院で院内農耕作業、2週間は自宅に外泊して農業を行う状態。小カズ、ジャガイモをうえている。家には家族が9人。父は80すぎ、母は76歳。兄は56歳、農業。次兄は洋服、着物の行商をしている。自宅の裏に、1階が物置きで、2階があいているから、そこに住んではどうか、と長兄は言う。1974.9 退院。家族、特に長兄の支持がJの退院を容易にした点は、見逃せない。国民健保。

症例 10 K男 1942.1 生

父母

<input type="checkbox"/> +若い時	1. <input type="checkbox"/> +幼時	4. <input type="checkbox"/> +栄養失調
<input type="checkbox"/> 64歳	2. <input type="circle"/> 35歳	
	3. <input type="checkbox"/> K30歳	

1972 現在

鹿児島に生れ育つ。両親はイトコ同士。K3歳時父は

戦死。その後母1人に育てられた。母は野菜の行商、養鶏を行い、貧しい生活であった。地元の中学校は留年したが卒業。その頃母が相続した土地が高く売れたりして生活が楽になり、姉は上京して短大に進学。Kは成績が悪かったので、地元の私立高校に進学した。高校2年の頃発病し、高校中退。家具製造工場で3か月位、ニス塗装の仕事をしたが、喘息発作のためやめた。その後Kは運転免許をとったが、職に就いても長続きせず。1967.4 (K25歳) 持病の喘息発作で不眠持続。不穏傾向となり、近所のドアを無断で開けたり、行為がまとまりを欠き、地元のO病院受診。その後通院中断。家族との人間関係の衝突頻発。家に閉じこもり、外界との接触を断つ。

1967.8 L病院入院前夜、20時頃鳥小屋でガタンと大きな音がした。家族の者が行ってみたら、Kがふみ台をけとばし、天井から紐を下げて縊首企図。L病院に緊急入院す。Kは「死にたい」と抑うつ症状著明。Kは実母との関係が密接であったが、実母が退行期精神病を発病してL病院入院に衝撃を受けている。義兄や姉は口もきいてくれぬ。Kを遠ざけようとする。Kは姉に近づきたがっているのだが……。KはL病院に6か月入院。退院後プラプラしていた。

集団検診で結核が発見され、Kは1971 東京の結核専門病院に入院。この病院のワーカーが鹿児島の姉にKの退院問題について問合せた所、姉から直接の返信なく、千葉の従兄弟を通じて次の意思表示あり。「Kを鹿児島に引取りたくない。このまま東京で就職させてほしい」従兄弟の解釈によれば、姉は退行期精神病の母と精神薄弱の実子をかかえ、そこへKに帰らなければ、重荷はかかるばかり、という感情ではないか、という。

1972.4 Q病院転院。生活保護適用。院外作業療法も試みられたが、思わしくない。1973.8 鹿児島に長期外泊、退院移行を試みたが、家族の受け入れ状況が悪くQ病院に舞戻った。家族は鹿児島のL病院転院なら受けれる、という事である。Kは東京での社会復帰・自立はきびしい、という実情のため、1974.11 L病院へ転院。Kは知能指数79で、Q病院入院中は生活保護適用。1975.9 Q病院に舞い戻って再入院。

症例 11 L女 1915.8 生

父母

<input type="checkbox"/> +ガソ	1. <input type="circle"/> L44歳	4. <input type="circle"/> 37歳
<input type="checkbox"/> 67歳	2. <input type="checkbox"/> 42歳	5. <input type="checkbox"/> 34歳
	3. <input type="circle"/> 40歳	6. <input type="checkbox"/> 32歳

1959 現在

千葉の高女卒業。女子大英文科2年(1934)実父(中

佐) 死亡のため中退。東京のデパートに2年勤務。戦争となり、陸軍省に勤務し、経理事務を敗戦までやっていた。戦後大手メーカーに勤めた。その某課長はジャワ帰りで、妻子を田舎に置いて独身生活。その課長と恋愛関係に陥る。1950 (L35歳) 頃発病。畳の上に小便をしたり、不潔行為あり。1951初、大学病院を受診し、精神分裂病と診断。検査の結果、梅毒反応検出され、マラリア療法施行。別の大学病院入院し、3か月で症状消失、退院。

退院後、この医師2名を恋愛の対象として追いまわし、医師の自宅に押しかけて「私は先生の奥さんになりますから、あなたは実家に帰りなさい」等といった。その後外人家庭の住込みメイド等を3~4日で転々とした。1954年 (L39歳) 2世のメイド先で現金を盗んで刑事事件となる。また、腕時計を盗んだりしたが、これは示談となった。弟の結婚をこわそうとし、母親に暴行。1954.11 Q病院入院となる。

1958.1からLの医療費は自費となり、1959.1から弟の健保家族となる。当時の兄弟の状況次の通り。2.□茨城県の高校教師。3.○結婚して静岡県在住。4.○結婚して千葉に実母、夫と子供2人の4人暮し。この妹がLの面倒を見る程度みている。5.□海運会社勤務。長崎在住。6.□化学メーカー勤務。横浜在住。

Q病院のワーカーが実母訪問。しかしQ病院記載の住所には実母宅はない。電話帳にも載っていない。ようやくさがし当てた住居は高台の邸町で、門構えの家。母は建増した隠居所に住んでおり、暮し向きは楽そう。母の陳述によれば、Lは前の病院の医師に一生病院に居らねばならぬと言われた。入院料と小遣いは、兄弟3人が分担しており、嫁たちも了承している。Q入院以来、家族が面会に行つたことは全くない。Lのしつこい帰宅要求に困り果てたため。高校教師の弟が上京の折に面会にやる、という。布団、衣類の要求があれば補給する、と語った。

1968.10 Lは無断離院。しかしまもなく帰院。その後、外泊は年2回位。外泊の際は、いつも母はLを習志野に1人住まいしている叔母の所に泊めている。1971.9 (L56歳) 院外作業療法開始。15.30~18.00まで。パンの包装、サンドイッチの詰め作業をする野田食品。会社

側は人手不足で、日曜日も来てほしいと言う。Lは、やってみたい、やれそう、という。初出勤日は単調な作業だが、余り早くできぬ。夕方になり、人が少なくなると、少し複雑な作業も加わるが、やれそうである。2週間後、会社側から電話あり、能率が良くないからやめてほしい、とのこと。Lは自分の能率が悪いとは思えない。賃金は低くとも仕事を続けたい、という。結局退職。

1971.10 石田紙工に職安を通じて院外作業に就職。Q病院から通勤している事をかくしていた。1972.2 石田紙工の日給1000円、月に2.4万円。しかしQ病院から通勤している事が会社側にバレた。職安からQ病院に苦情が来た。Lは月給制から日給制にもどされる。1972.4 母と妹がQ病院に来院。母は80歳の高齢で、主として妹が事情を述べた。

(1) Lは5月に退院になると言っているが、家の者はそれぞれ嫁ぐなり、一家を構えており、Lの面倒を見る経済的・物理的余裕はない。小市民ですから……と言う。

(2) 家族の本心を言えば、Lは永久にQ病院においてほしい。Lは病気とはいえ、発病前から問題の人だった。わがまま、独断的、家族を困らせる存在。病気というより、性格の問題と言える。

母と妹の陳述中にLが入って来ると、母と妹は帰ろうとする。家族はLに対して拒絶的である。しかし入院費等はキチンと払っている。1972.5 会社の方は再び月給制となり、退院が決り次第、健保もつくという。1973.2 アパート試験外泊開始。しかし家族は依然として退院は困ると主張。もしQ病院がLを退院させるのならば、家族はQを告訴するという。Q病院は告訴を受けて立つ、ということで退院にふみきる。1973.10 退院。当時Lは共済組合家族。

退院後しばらくは石田紙工勤務が続いている。しかしそのうち、Q病院職員を結婚してくれと追いまわす。Lは石田紙工を退職し、Q病院の職員の家族まで追いかけた。このため、外来は中断。Q病院のこの職員が所要あって戸籍抄本をとりよせた所、Lが入籍されているのでびっくりする。この頃Lの病状悪化し、1975.9 Q病院再入院。なお 2.□(高校教師)は白内障で失明し、その後失職した。